

(メッセ海外通信 2012年1→3月号掲載記事)

～日本語学習者から私たち日本人が学ぶべきこと～
日本語弁論大会を通じて

下関市総合政策部国際課
(青島市派遣職員)
三浦 万季

去る10月22日に「第10回山口銀行杯日本語弁論大会—大学生の部大学対抗戦および表彰式」が青島市内で開催されました。この度、10回目を迎えたこの弁論大会は株式会社山口銀行並びに青島市人民政府対外友好協会が主催し、既に春には「高校生の部」、「大学生の部1組(3、4年)」、「大学生の部2組(1、2年)」および「社会人の部」の個人戦が行われており、本大会までに延べ1000人の日本語学習者が参加しました。

この日は、春の決勝大会で決定した各部の個人戦の成績優秀者への表彰式と、「大学生の部2組(1、2年)」個人戦の成績優秀者のうち、5大学2名ずつによる大学対抗戦が行われました。

大学対抗戦に出場した大学生たちの弁論の題材の中で多かったのは、「日中国交正常化40周年を前にした今後の日中交流について」と「東日本大震災後の日本に期待すること」でした。



弁論大会会場



表彰式

戦争や外交問題のイメージなどから、はじめから日本が好きだったわけではないという学生もいました。しかし、日本語を学ぶ中で、日本の伝統文化・食文化・ポップカルチャーなどから日本に興味を持ったことや、大学の日本人教師と一緒にアルバイトをした日本人学生から日本人の真面目さ、礼儀正しさ、優しさなどに触れ日本が好きになったこと、東日本大震災後の日本人の諦めない前向きな姿勢に非常に感銘を受けたことなどを語ってくれました。そして最後に、「今後日中友好のために尽力したい」、「中国の良いところ、日本の良いところをそれぞれの国の人々に伝えたい」、「教師になって日本は良い国だと中国の子供たちに伝えたい」など日中交流のために自分たちが将来したいことをしっかりと話してくれました。大学生たちがこの弁論大会で語ってくれたのは“将来”どのように日中交流のために貢献したいかということでしたが、私は、既に出場した大学生全員が日中交流の架け橋として日中両国の人々に大きな影響を与えていると感じました。なぜなら、この弁論大会を通じて、聴いていた私たち日本人は一人一人の大学生が日中交流を真剣に考えていることに非常に感銘を受けるとともに、高い日本語レベルから並々ならぬ努力をしていることが分かり、その努力に共感を覚えたからです。日本語学習者は、日本人と心の交流をしたいと心から願っています。そして、日本が好きだからこそ、日本人や日本をよく見えています。

私たちに求められるのは、私たちが中国の良いところを伝えていくことももちろんのことですが、より重要なことは、日本語学習者の持っている日本人や日本に対する良い印象が持続するよう努力していくことだと思います。この弁論大会に参加した延べ1000人の参加者をはじめ、中国におけるすべての日本語学習者は、日本の良い印象を中国の一般市民に広め、互いの国の心の距離を近くしてくれる重要な役割を担っています。こうした中で、私たちに求められる責務は、日本語学習者たちが中国の一般市民に伝えようと尽力するに値するような日本人、日本の姿を保つことであると言えるのではないのでしょうか。